慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』(第四十六～五十二章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres XLVI–LII) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.66 (2018. 3) ,p.145(12)- 156(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20180331-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』

（第四十六～五十二章）（翻訳）

山本武男

これまでのあらすじ

予想もしていなかった自らの行為の結果に煩悶するルネ。兄アンリは、夫人と不倫をしてまで入り込んだ富豪の一家の娘ノエミとの結婚を目前に控え、相手の父親の要求で、貴族の名を名乗る手筈も整えた。何もかも思惑通りに進んだかに見えたアンリの野望を打ち砕いたのが、実の妹ルネであった。彼女は世間知らずの独善的な正義感から、兄が名乗ることになった貴族名の本当の主にその事実を伝えた。屈辱を覚えたその没落貴族はアンリと決闘で決着を付けることになり、銃の腕には自信のあったアンリが、運命の皮肉に弄ばれたか、斃れる。自分が兄の死の原因を作ったとは人に言えないルネは、気を病み、心臓にも病状が現れ、彼女を溺愛する父親は悲しみに暮れるのだった。

〔翻訳〕

四十六

病人と云う者は、病気が快方に向かう場所、治療し得る土地の存在を信じているものである。病める者たちには、故郷の微笑みや揺り籠の優しさを伴って蘇ってくる場所、嘗て住んでいた思い出深い些細な空間がある。乳母の腕の中で子供が抱く不安な思いに似た彼らの希望は、嘗ては自分の誕生を見守り、自分を見殺しにはしそうもない故郷の田園や庭園、村落へと逃げてゆく。

ルネはモリモンのことを考え始めた。一たび彼の地に赴けば、もう病気は治るだろうと彼女は思った。そう実感し、それは確信に変わった。このラ・ブリッシュの家があたしを不幸にしたのだ。あたしはモリモンではとても仕合せだった！　病苦から起こる変化への渇望や運動の欲求は、そんな想念を彼女の中で増幅させ、絶えずより揺るぎない、より激しいものになっていった。彼女が父親にその思いを打ち明けると、彼の思いは乱れた。それを実現したとしても何の妨げにもならない筈だ、なぜなら製糖所はひとりで稼動し続けるし、経営者のベルナール氏は信用するに足り、何でも出来る人物なのだから、秋に帰ってくれば事は足りよう。「何時(いつ)あたしたちは出発するの？」彼女は耐え兼ねて、来る日も来る日もその言葉を繰り返した。

モプラン氏は譲歩した。娘はかの地に行けば体調が良くなると強く約束したので、遂に父親は彼女の言を信じられるかのような気持ちになったが、この娘の誓いには病気の影響がありそうだとは感じていた。彼が相談した医者は、「そうですね、まあ田舎なら良いでしょう……」と、少しでも転地すれば死から遠ざかることが出来る

と信じる、死にかけている人に特有の要求に慣らされている者の口調で答えた。

モプラン氏は急いで仕事を片付け、家族はモリモンに向けて出発した。

出発の喜び、旅のささやかな興奮、旅が甚(いた)く弱っている者にさえ与えるたくましい力、汽車の開いた儘の昇降口からの吹き付ける風が病人をショーモンまでのあいだ元気付けた。彼女は大して疲れもせずに到着した。モプラン氏は彼女をそこで一日休ませ、そして翌朝になると娘を、町中探して見つけることが出来た最良の馬車の奥の座席に乗せ、一行はモリモンに向けて出発した。道は整備されていない県道だった。旅は長く苦しかった。九時を過ぎると早速気温が上昇し始めた。十一時には、日の光が馬車の革製の座席を熱くした。馬たちは汗をかき、息を切らし、進み辛そうだった。モプラン夫人は前の座席のクッションの上でうとうとしていた。モプラン氏は娘の隣に坐り、その腰に腕を回しながら間に枕をあてがっていたが、彼女はそれで身を支え、馬車の上下動のたびに跳ね上がってはまたそこに落ち着いた。時々彼女は時間を訊ね、返事を聞いて、「まだそんななの！」と言った。

漸く、三時ごろ目的地に近付いて来た。到着まであと一里というところまで来た。空は少し雲に覆われて、気温は涼しくなり、埃も立たず、大地は息衝いていた。一羽の鶺鴒(せきれい)が馬車の前を飛び始め、沢山の石を飛び散らせながら馬が三十歩行くところをひとっ飛びしたりした。短い楡の並木が道の片側に沿って現れ、田野には畑が見え始めた。ルネは故郷の空気に触れた所為か、活気付いて来た。彼女は身を起こし、ドアの窓枠に肘を突いて、手の甲に顎を載せ、馬車の中で子供たちがする様に過ぎ行く景色を眺め始めたが、彼女のその姿は目に映るものを胸いっぱい吸い込んでいるみたいに見えた。そして馬車が進むに従い、彼女は言った。「ほら、壊れた隠者の庵の大きなポプラの木！……あそこの沼には蛭で釣りをする少年たちがいたんだったわね！……ああ！　あれ、リシェさんの水木の林よ！……」

村に近い小さな森では、娘に指摘されて初めて気が付いた堀端の一輪の花を摘んでやる為に、父親は馬車から降りなければならなかった。

馬車は道沿いの旅籠屋を過ぎ、村の入り口に近い家々を、食料品店を、蹄鉄工の仕事場を、大きな胡桃の木を、教会を、骨董品の蒐集家の時計製造業者の店を、ピジョー農園を過ぎた。村人たちは野に出ていた。猫を濡らしていじめていた子供たちは、通り掛かる馬車を見る為にそれをやめた。家の入り口脇のベンチに腰掛け、羊毛のセーターに包まって日向ぼっこをしながらも震えていた老人の男は帽子を取った。やがて馬たちが止まった。馬車のドアが開いた。東屋の前で待っていた男がモプラン嬢を両腕の中に抱き留め、抱きかかえた。

「ああ！」彼女を抱き上げながら彼は言った。「お可哀想なお嬢さま、小枝の束ほどしか重さがござらん！」

「こんにちは、クレティエノ！　こんにちは、我が友よ」、そう言ってモプラン氏は彼の下で働いていた年老いた庭師に握手を求めた。

四十七

翌日以降、彼女は寝覚めの素晴らしいひとときを過ごしたので、そこでは一日の始まり、天と地との朝が、彼女の思考の夜明けの中で、自分の人生の曙と混ざり合ったのだった。人生最初の思い出が、一日の始まりの庭の歌声と共に彼女の中に蘇った。鳥の巣のざわめきが、彼女の幼年時代を目覚めさせた。

父親に支えられる、というよりは運ばれる様にして彼女は庭を、果樹牆を、家の前の小牧草地を、木陰の水路を、池とその淀んだ大きな水面を、それら全てを再訪したがった。彼女は木々や並木を徐々に、夢の中で見たことどもを思い出すかのように再認していった。彼女の足はひとりでに、草で覆われて分り難くなっている嘗て

通った小道に分け入った。廃墟は、相当古びているだろうと彼女が想像していたものより更に何年分も古びて見えた。幼少の彼女が走り回り、そのドレスが影を落とした幾つかの野原を再訪した。彼女は、死んだ子犬を埋葬した場所を見出した。その子犬は白くて、ニコラ・ビジュという名だった。それは彼女の愛犬だった。父親が病んだこの子犬に浣腸をした後、腕に抱いて菜園を散歩する姿が眼前に彷彿としてきた。

家からも幾つもの思い出が湧き上がった。様々な部屋のあちらこちらの隅は、屋根裏部屋に押し上げられた後、久しぶりに手に取られた玩具とよく似た効果を齎した。古い屋根の上のやはり古びた風見の悲しげにキーキーきしむ音は彼女を喜ばせたが、それは少女のころの彼女に恐怖と夢見心地を交互に感じさせたものであった。

彼女は活気付き、元気を取り戻したかに見えていた。環境の変化、故郷の空気、思い出が彼女の病気を取り除けてしまったかのようであった。そういう状態は二三週間続いた。

ある朝、父は並木道で、隣を歩きながら娘の様子を眺めていた。彼女は白薔薇の大きな茂みで古くなった薔薇を切って楽しんでいた。日の光が透ける大きな麦藁帽子の下で、彼女の痩せた小さな顔には日の光と柔らかい影が落ちていた。彼女は陽気に、嬉々として一つの薔薇の木から別のそれへと移っていったが、薔薇の棘が戯れたがるかのように彼女のドレスに引っ掛かった。それで、鋏で切るたび、開いたまま犇（ひしめ）き合い、中心が桃色をしていてとても生き生きしている小さな薔薇を幾つも付けた枝から、土色の枯れた薔薇が落下したが、それは恰も花の亡骸といった風情であった。

突然それらの動作をやめて、ルネは父親の腕の中に飛び込んで言った。「ああ！　お父さま、あなたが大好きなの！」そして彼女は泣き崩れた。

四十八

この日以来、快方に向っているかに見えた経過は一頓挫した。彼女は少しずつ、人生の最期の接吻が彼女の頬に付けた健康の色艶を失っていった。恢復期の体を捉える魅惑的な動揺、つい最近まで父の腕にすがらせた、あちらこちらを往来したいというあの麗しい欲求を彼女はもはや抱かなくなった。苦しみを忘れた陽気さ、蘇った希望から来る幸福感に満ちたお喋りはもはや、当初の日々のようにその魂から口元へ上って来ることはなかった。彼女は、話をするのも、返事をするのも物憂そうであった。「大丈夫、なんでもない……調子はいいわ……」彼女はそんな言葉をただ苦しげで、悲しげな、堪えている風の語調で唇の間から漏らした。息苦しさが彼女をぐったりさせた。胸に重しを乗せられているかのように感じられ、呼吸はそれを持ち上げるのがやっとだったのである。圧迫感やぼんやりとした不快感がそこから彼女の存在全体に広がり、苛立ちで包み込み、すっかり生気を奪い、運動への欲求も全く失われ、疲労困憊し屈服した状態となり、外出はおろか、一人で起き上がる力すら失ってしまったのだった。

父親は娘に吸い玉を掛けさせることに決めた。

四十九

ルネは病人特有の、あのゆっくりとした手付きでネッカチーフを外した。彼女の指は、小刻みに震えつつまさぐり、脱ぎすてる為にシャツの釦と肩紐とを探した。父は母と一緒に彼女が身をくるんでいたフランネルの下着

と綿入れの下着とを脱ぐのを手伝ったが、すると哀れな小さな体が半ばまで見え、すかさず彼女は肌着類を握って胸元まで隠したが、その裸は恥じらいと衰弱との所為で激しく小刻みに震えているのだった。

彼女は父を見つめていたが、蠟燭には火が点り、丸められた書類が置かれ、ボルドー・ワイン用のグラスが幾つか置いてある、そんな中でこの視線は、彼女の傍に準備されている火や鉄の道具を前にした身体的な恐怖から不安げであった。

「これでいいの？」無理に微笑もうとしながらルネは言った。

「違う……こんな風に坐って」彼女の姿勢を指示しながらモプラン氏は言った。

低い炉辺椅子の上に坐っていた彼女は後ろ向きになって背中を見せたが、両の手を背凭れの頂に置き、頬を片方の手の甲の上に押し当て、正座し、両足を揃えてその先を交差させ、小さな安楽椅子の上に跪き、蹲っているかの様に見える姿勢になったが、後ろの者に怯えた横顔を僅かに覗かせ、肩をさらけ出し、既に骨格が角張って出ているその体はそのまま棺桶に入ることが出来るものであった……解けかけた髪は背中の窪みに影を伴って滑り落ちている。肩甲骨は張り出していた。脊椎の結び目は一つひとつ見る者の目にはっきりと捉えられた。肘窩までずり落ちたシャツの肩紐の下で、可哀想な小さな肘の先がとがっていた。

「これでいいでしょ！　お父さま？」

彼はそこにいて、突っ立ったまま、自分が何を考えているのか分らなくなっていた。娘の声を聞くと、彼はグラスを手に取ったが、そのとき、彼はこれらのグラスがルネの聖体拝受の日の晩餐の為に購入したものだったということを思い出した。彼は一枚の紙片に火をつけ、それをグラスの中に捨て、目を瞑ったままグラスをさかさまにした……ルネは苦しそうなぜーぜー言う息遣いをし、ぶるっと身を震わせて背中の骨をしなわせ、それから言った。「あら！　本当だわ！　こうしていると何時もよりずっとしんどいと思っていたけれど……」

モプラン氏がグラスを手放すと、それは滑って落ちたが、要するに吸い玉が上手く行かなかったのである。
「もう一つ！」彼は妻に向って言った。
モプラン夫人はもう一つのグラスをゆっくりと持ってきた。
「ほら、渡しなさい！」そう言うと彼は、彼女の手からそれを奪い取った。
額には汗が滲んでいたが、彼はもう震えてはいなかった。今回は真空が出来たので、グラスの回りに沿って肌が皺となり、黒ずんだ紙片に吸い上げられるように肌が盛り上がった。
「ああ！　お父さま、そんなに押し付けないで」と言ってルネは上下の唇をきつく閉じた。「手を放して……」
「いや、パパは触ってないよ」とモプラン氏。「ほらね」
そう言って彼は彼女に両の手をかざして見せた。
ルネの白い肌は絶えずグラスの中で盛り上がり、赤くなり、小さな斑点が出来て、紫がかった色になった……置かれた吸い玉は、取り外す段になると、グラスの一方の縁から肌をはがす為にはもう一方の縁の方に力ずくでグラスを寄せねばならなかった。しばしばモプラン氏はそれを二三回やりなおさねばならず、骨と皮のようなこの肌にきつく押し付けなければならなかった。

五十

病気は見えない形で進行し、肉体は鈍い痛みの中で憔悴していく。そして、あの恐ろしい外的な変化が現れるので、緩慢な速度でではあるが表情が失われてゆき、徐々に人格が損なわれ、死の影の訪れの下に、愛された体が死体へと移行し始めたことを告げる兆候を顕し始めるのだ。

日ごと、モプラン氏は娘の中に、もはや見出されなくなった、存在が認められなくなった諸要素を探してみたが、その目、その微笑、その手振り、その歩き方、二十歳という年齢に充満した誇らかなそのドレス、こういった彼女の身辺を浮き立たせ、過ぎ行く人の気を引いた若い娘の青春のすべて、それらことごとくは、恰も生命の表情が彼女から退散してしまったかのように、飛び立ち、過ぎ去り、消え失せてしまった。彼女は何かに手を触れても、最早それを動かそうとはしなかった。彼女の服は、その痩せた体にみすぼらしく落ち掛かり、老人の体軀をくるんでいるかのように幾つも皺が出来ていた。彼女の足取りは引きずる様であり、もう踵を鳴らすことはなかった。彼女が抱擁するときは、不器用に相手にぶら下がる様な恰好になり、相手を愛撫する際にも最早優美さは無かった。あらゆる手振りは小さくなり、自分自身に密着して行われたが、それは寒さを感じ、なるべく体を外気に触れさせたくない人の仕草の様に見えた。彼女が腕を下げっぱなしにすると、それは濡れた鳥の翼の様だった。両者は、似ても似つかないものである筈なのに、である。そうして彼女が父の前を歩く際には、背は湾曲し、胴は圧し潰され、腕はだらりと下がり、ドレスはストンと落ちており、モプラン氏には最早それは、すでに自分の娘とは思えず、その姿を見ては、嘗ての娘の姿を思い出してしまうのだった！

彼女の口の傍には影が出来、微笑むと中に食い込む感じだった。手の小指の近くに出来た黒子は大きくなり黒い壊疽となった。

五十一

「お母さま、今日よね、アンリの誕生日は……」

「分っているわよ」モプラン夫人は動かずに言った。

「みんなでマリクールの聖母像でもお参りしない？」

モプラン夫人は立ち上がり、部屋をいったん出て、自分の肩掛けと帽子を取って戻ってきた。

三十分後、モプラン氏はマリクールの教会の扉口の前で娘が馬車から降りるのを手伝った。ルネは小さな礼拝堂に向ったが、そこでごく幼少のころに恐怖心を抱きつつ祈りを捧げた、大理石の祭壇の上の小さな木彫りの真っ黒な、奇跡を起こすとされる聖母像を見出した。昔と変わらずそこに置かれてある教理問答の際に用いる椅子に腰掛け、彼女は非常に低い声で祈り出した。その隣で母は立ったまま教会内部を眺め、祈ろうとはしなかった。それからルネは立ち上がり、父親の腕を借りようとせず、殆どしっかりとした足取りで、墓地に向って開かれた側面のポーチまで教会堂を横切った。

「あたし、あれがまだ在るか、確かめたかったの」掛けて吊るされている奉納物の中ほどにある古い造花の花束を父に示しつつ彼女が言った。

「さあ、いい子だから」モプラン氏は声を掛けた。「あまり長く立っていてはいけない。もう、うちへ帰ろう」

「あら！　まだまだ時間はあるんでしょ」

ポーチの下に石のベンチがあって、そこに日の光が差していた。「熱いわ」その上に手を置いてみて彼女が言った。「そこにあるタータンチェックのウールの肩掛けを羽織らせてよ、ここに一寸坐っていたいな……背中に日を浴びてみたい……ここで」

「分別をわきまえなくてはだめだよ」とモプラン氏。

「だって！　そうしたいのだもの……」それを受けて父が娘を坐らせようとしたとき、父に寄り掛かりつつ娘は溜息ほどの穏やかさで一声、「何て愉快なんでしょう、ここは！」

蜂たちが傍でぶんぶん鈍い音をさせている科の木は小刻みに、静かに揺れていた。雌鶏たちは密生した草の中

を向うへ行き、餌を探し、見付けては啄(ついば)んでいた。塀の下では、二輪荷車と、乾いて白くなった泥を車輪に付けた犂の隣の、皮を剝がれた幾本かの木の切り株の上で、ひよこたちが跳ね回って楽しんでおり、また鴨が丸くなって眠り込んだりもしていた。教会の中は消え入るような声による囁きらしきものが聞こえ、蒼穹の光がステンドグラスに戯れていた。絶えず鳩たちが空を舞い、彫刻の窪みや古い石造りの建物の穴に先を競って入り込む。近くの小川はさらさら音を立てており、一羽の白い若鶏が波立った急流に流されていった。

「ああ！」少ししてルネが言った。「あたしたちって、もっと別のかたちで生まれることが出来たに違いないわ……どうして神様はあたしたちに肉体をお与えになったのかしら？……醜いわ！……」

彼女は、墓地の隅のあちこちで小さく土が盛り上げられているのに目を落としたが、それらの前には樽の箍(たが)を半分にしたものが一つずつ、アーケードの形になるように埋められて部分的に交わっており、その後ろには元気の良い昼顔が伸びていた為、半ばは見えなくなっていた。

五十二

病気はルネにあの苛立ちや、唐突な欲求や、世話する者に病人の苦痛を僅かながらも納得させる神経性の癇癪を齎しはしなかった。起こることに対して彼女は従順だった。生命が流れ出ていってしまうのを引き留めよう、止めるよう努力しようといった様子は彼女には見られなかった。彼女は優しく穏やかな儘だった。彼女の欲することのなかには過度の気紛れから来る要求は含まれなかった。不安で彼女を包み込んでいるものはまた、安らぎででも彼女を抱いていた。彼女は自身の純白の魂に、美しい夜のような死が訪れようとするのに任せていた。

しかしながら或る時などは、本能が彼女の中で目を覚まし、弱くなった肉体のもとで彼女の意思も衰え、生命

から彼女を引き離してゆくひそやかな作業に耳を澄ましたりした。そんなときの彼女はじっと黙り込み、恐ろしさを感じさせるほど集中しており、虚無を思わせる姿勢に似つかわしいあの沈黙したままの不動状態を保っていた。彼女は一日の大半を振り子時計が時を告げても反応せず、一点を見詰める視線で自分の足の少し先の虚空を眺めて過ごすのだった。それゆえ、父親は娘の目から何も読み取ることが出来なくなってしまったのであった！ときどき、二三回瞬きしたあと彼女は瞼を半分ほど閉じて目の表情を隠してしまうので、半開きのまま寝てしまったものと彼は思ったものであった。娘に話しかけ、彼女の関心を引きそうなことを脳中に探し、冗談を言おうと努めもしたが、それは彼女を楽しませる為であると同時に、自分の話を聞かせ、ここに自分がいることを感じているらしい状態に彼女を引き入れる為でもあった。が、父の話の半ばで、注意も思考も知性も彼から離れてしまっているのが娘の顔で分った。父は自身の愛情の中に以前のような温かさを感じなくなった。娘の近くにいても今や、冷ややかな気持ちになるのだった。それは恰も病が父親から娘の心を少しずつ盗んでいくかの様な日々であった。

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 230–239.